

阿弥陀様と私

駒
澤

勝

はじめに

皆さん、こんにちは。私は小児科医ですが、仏様の話をします。普通仏様の話をする相手はいつもお年寄りの人ばかりで、皆さんのような若い方にお話をしたことはありませんので、少し調子を合わせにくく感じています。

日本の小児科医療の現状

さて、日本の医学は世界のトップレベルです。小児科も世界の一番のところを行っていると思います。小児科医療のレベルを示すひとつの目安として乳児死亡率というのがあります。一〇〇〇人生まれた赤ちゃんのうち、一歳までに何人が亡くなるかという数字です。日本は今、四です。つまり赤ちゃんが一〇〇〇人生まれると、そのうち四人は一歳まで生きることができないが、九九六人は一歳まで生きるということであります。実は人の一生のうちで一歳までの死亡率が一番高くて、一歳まで生きる子どもはほとんど大人まで生きることができると、この数字が重要視されるのです。外国ではこの数字はどうか。北欧のスウェーデン、デンマークでは四くらいですが、医学が進んでいると言われているドイツ、イギリス、フランスでも七、八という数字です。アメリカでも一〇〇〇人のうち九人までが一歳まで生きられない。それが日本では四人だというわけです。南米のアルゼンチンでは三四という数字、エジプトでは

阿弥陀様と私

七七、日本がいかに少ないかということがわかると思います。ですが、統計が始まった明治の頃、日本は二五〇くらいでした。一〇〇〇人生まれた赤ちゃんのうち二五〇人、四人に一人は一歳までに命がなくなっていました。その後、この数字はどんどん下がりました。太平洋戦争中一時統計が途絶えましたが、戦争が終わった直後の昭和二二年で七七です。今のエジプトと同じくらいです。私が医者になったのは昭和四三年ですが、その時には二五でした。その時から約三〇年の間に四まで下がったことになります。

私は医療現場で、以前は助からなかったのが、どんどん助かるようになることを肌身で感じる状況でした。私が医者になった頃は、まだ肺炎にかかって亡くなるという子どもが時々いました。下痢がひどくて脱水から命を落とすことも珍しい話ではありませんでした。でも今は肺炎で死ぬことや下痢で死ぬなんてことはまずありません。〇―157というバイ菌にかかって、たまに下痢で命をなくすことが新聞沙汰になるくらいであります。

未熟児も、私が医者になった頃は、生まれた時の体重が一〇〇〇グラム以下ではま

ず助かることはなかったのですが、今は九〇〇グラムでも勿論助かるようになりました。八〇〇グラムでも五〇〇グラムでも助かる。今は四〇〇グラムの子どもまでもが助かるようになりました。四〇〇グラムの未熟児と言うのは手のひらにのせるくらいの赤ちゃんです。大変な医療の技術と知識が積み込まれているわけであります。

私の同僚の先生は小児外科をやっています。食道閉鎖、生まれつき食道が通じていないという病気があります。これはほとんど助けることができなかつたのが、今は手術でほぼ一〇〇%助かるようになりました。おなかの皮が破裂していて、中の腸や胃や肝臓が全部外に出てしまっているという子どもが生まれることがあります。治すのは技術的に大変難しく、昔はほとんど全滅でしたが、今は一〇〇%近く命が救われるようになりました。このように小児外科の先生も難しい病気をどんどん助けるようになって、乳児死亡率が千分の四に減ってきたわけです。

乳児死亡率にはあまり関係ありませんが、私は子どももののガンを専門にしてきました。小児癌のうち特に多い白血病は、私が医者になった頃は全滅で、白血病という診断をもらったら二、三週間で命がなくなるというのが常識でした。が、今はいろんな治療

阿弥陀様と私

法が開発されて七割くらいが助かるようになりました。新しい論文が次々に発表され、それと同じ様な治療法を応用すると、私の前に来る患者さんたちも、以前は助からなかったのが二、三カ月生きるようになりました。五、六カ月生きる子どももいるようになりました。新しい方法で一年も、二年も生きる子どもがいるようになりました。そしてやがてついに「この子どもは治ったのではないか」と思うような例が出現するようになり、そして今や白血病の子どもが助かるのは珍しくなくなって、白血病と診断される子どもの七割くらいが助かるようになってきたわけであります。

このように医療現場で私たちの知識や技術を応用すると、その効果が現れて、命をなくすような子どもを助けることができるので、医者冥利に尽きるといって感じて医者としてとてもやり甲斐を感じておりました。子どもたちに幸せを運ぶ男ではなからうかと思うくらい充実感のある生活をしておりました。

でも一方、医学がどんどん発達するにもかかわらず、その恩恵を受けることができずに、希望通り経過しなかった子どももまた数知れないほどおりました。先ほど話したように、白血病も今でこそ七割くらい治りますが、最初のうちは全滅でした。中

には最初の経過からは「助かるかな」と思っていた子どももやはり再発してしまった者もいます。一旦再発すると薬の効き目が悪くなって入院期間が長くなる、入院回数が多くなるということで、その後の経過はなかなか良いようにいかない。一旦悪くなると大抵は負け犬のごとくどんどん悪くなって、命をなくする経過を辿るのです。

そのような場合、子どもたちは自分が大変な病気にかかっているらしいと、うすうす知るわけです。五、六歳の子どもさえもが「自分はどうやら長く生きられないらしい」と感づいてくるのですね。すると子どもたちは落ち込んでベッドで何もしゃべらなくなる。笑わなくなるわけです。そういう子どもを笑わせてやろうかと、回診の時、冗談を言ったり、おなかをくすぐったりするのですが、ちっとも笑わない。ニコリともしない。ただひたすら横を向いて目をあわそうとしません。

別の子は自分の行く先が心配で心配で、その事を私たちに尋ねたいのですが、でも、答えが怖いのです。でも、もういたたまれなくなって、思い切って私たちに質問してきます。このままいくと自分は死ぬのではないかというのが心配で、そこが聞きたいのです。恐る恐る聞くのです。その際も、大抵の子どもは「死ぬ」とか「悪くなる」

阿弥陀様と私

という言葉自体、怖いのです。だからそのような言葉は使わなくて、殆んどの子どもは質問する時には「先生、よくなるん？」と言う聞き方をします。私はこういう質問に慣れていますから間髪入れず「うん、昨日の検査結果はよくなっていたよ」、「一昨日から使い出した薬が効いてきたよ」などと答えていました。最も心配していた病気が「よくなる」と言われるのだから、「やったあ、よかった！」と言うはずではありませんが、また一〇人中九人まで「ああ、またウソ言っている」と言わんばかりに「ふーん」と無愛想に横を向くのです。ちつとも喜んでくれないのであります。

ある子どもは最近、ちつとも笑顔がない。ベッドの上で沈んでいる。今日は一つ笑わせてやろうと、くすぐったり、冗談を言ってみたりするけど、ちつとも笑わない。小学校二年生のその子は、やがて何も言わずに目に涙を浮かべて診察しようとする私の手を握りしめるのです。先ほどまで冗談などを言っていた私もさすがに言葉に詰まってしまう。ほんのちよつとの間ですが、沈黙ができてしまいます。決して一分も二分もではなく五秒か一〇秒の沈黙なのですが、実はその沈黙が子どもに言葉でしゃべる以上のメッセージを伝えてしまいます。「実はお前は大変な病気なんだ。そんな

なに先が長くないかもしれない」と言葉で言う以上のメッセージが伝わってしまっ
て、後でどんなにお茶を濁そうとしてもお茶が濁らないのであります。

こういう子どもを見ると不憫に思えて、医者が無力であることを痛切に感じま
す。そして、そんな子どもがついに死ぬわけであります。白血病などのガンを専門に
診療してきますと、一週間のうちに二人も三人も死ぬこともあります。月曜日に二年
間付き合った子どもが死んだ。水曜日に一年半付き合った子どもが死んでしまっ
た。金曜日は四年もつきあった子どもが死んでしまった。などと次々に子どもが亡くなっ
ていくわけであります。そうするといよいよ加減な私にも、さすがに大変なシヨックで、
心に重くのしかかります。「子どもたちに何もしてやれなかった」とつくづく感じる
ようになります。敗北感、無力感を強く感じるのであります。子どもたちが可哀相に
見え、不憫に思え、悲しく思え、辛く思え、自分の力のないことの無力感、敗北感を
感じていました。

阿弥陀様と私

親の気持ち

いつからかはつきり解りませんが、こう思うこと、つまり、不治の病の子を不憫に思い、命を落とす子を悲しく思い、医者としての無力感、敗北感を感じる事が「何かおかしい」と思うようになってきました。しかし長い間、なぜおかしいと思うのかよく解りませんでした。何となくもやもやしていたある日こんな事がありました。

何時ものように夜遅く我が家に帰ると、今はすでに成人し、小児科医になっている当時小学校一年生の長男について妻が「実は、うちの子は特殊学級のお世話にならないければならないかもしれない」と言うのであります。私は平素、子どもの様子はほとんど見ずに病院で時間を過ごしていましたが、まさか自分の子どもがそういうことであるうとは夢にも思っていませんでした。妻のそんな話も、「いい加減なことを言うな。俺、疲れているのだから」という感じで受け止めていました。

妻とてこのようなことは決して喜び勇んで思いたいことはありません。自分の心

の中で「そうだろうか、いや違う」、「やっぱりそうだろうか、いや違う」と何べんも自問自答した挙句、「実は……」と話してくるわけでありますから、それなりの心当たりがあります。私が「バカなことを言うな」と言うと、「お父さんはそんなことを言うけれど、一度、子どもの様子を見に学校に行ったらどうか」。「うちの子どもは先生の言われることはほとんど何も解ってないみたいですよ」。「うちの子どもは友だちと会話が上手にできないようだ」。「友だちと一緒に上手に遊ぶ事も出来ないようだ」。「学校ではうちの子どもだけポツンとしているよ」。「近所の子どもがうちにたくさん遊びに来てくれるけど、あれはうちの子と遊ぶために来るんじゃない。うちの子どものおもちゃで遊ぶために来ているんですよ」などと、あれこれ言うのであります。平素チラチラ見ている自分の子どもの様子からすると満更でもなさそうなことを、次々と言われると、さすがに先程まで「いい加減なことを言うな」と言っていた父親も「へえ、そうか。そうだったのか」。「そんなことがあるのか」。「そうだったのか」。「ああそう言うことか」と深い海底にどんどん沈んでいく気持ちでありました。

家内は「何とかしてこの子どもを引き上げないといけない」。「自分は学校の先生の

阿弥陀様と私

免許を持っているから、毎日学校に行って、どんなことを習っているかを見てきて、帰ったら同じことを繰り返して教えようか」、当時、全国チェーンの塾が流行り始めていましたから「近所の子どもを集めてあんな塾でもしてみようか」、「いやいや勉強なんてどうでもいいから、友だちとの遊びの場を提供するようなことをしてみようか」、「ああしてみようか」、「こうしてみようか」といろいろ提案するのであります。が、私にはショックが大きすぎて、そんなことをしても到底引き上げられないだろうと思ったのであります。実際、病院で多くの知的障害の子どもに携わることがありましたが、「小学校一年の時には特殊学級のお世話になっていたが、卒業する頃には普通学級に戻った」、「そして、中学もまあまあの成績で、高校にも進学した」などという例はまずない。小学校一年生の時に特殊学級のお世話になる子どもは、卒業の時も中学も特殊学級で、その後もいわば特殊学級の一生を送る人がほとんどでしたから、自分の子どもも、今ここで特殊学級のお世話になるのだったら、特殊学級の一生を送ると考えるのが正解だろうと思えてきたのです。

しかし、だからと言って、父親として「特殊学級のお世話になり、いわば特殊学級

的 一生を過ごすだろうが、ま、いいや、しょうがないや」とは簡単に思えないのであります。我が子は特殊学級のお世話になり、特殊学級の一生を送るだろうけれども、「やっぱりうちの子どもにも人並の幸せがほしい」と思うのであります。もうちょっと厚かましく「特殊学級に行くのだけど、人並み以上の幸せがほしい」と思うのであります。もうちょっと厚かましくて「特殊学級の一生を送るのだけれども」ではなく、「特殊学級の一生を送るんだからこそ」、「うちの子どもには人並み以上の幸せがほしい」。「このことは誰が何を言おうと譲れるものか」という感じでありました。

そして「特殊学級の一生を送る我が子に人並以上の幸せ」の道を見つけるが父親の役目だろうかと、夜、布団の中であれこれ考えてみるものの、名案が浮かびそうにないのです。眠ることも出来ず、空しく考えあぐんでいるとき、病院の中で出会うお父さん、お母さんの顔がチラチラ頭をよぎりました。「ああ、そうか、あの子のお母さんも同じようなことを思っておられるんだろう」。「うちの子は不治の病だけど、人並みの幸せが要る」。もう少し厚かましく「うちの子どもは不治の病だけど人並み以上の幸せが要る」。「不治の病なんだからこそ、人並以上の幸せが要るんだ。誰か何を言

阿弥陀様と私

おうと、これは譲れるかい」と思っておられるだろうと思えたのであります。その時、以前から私が不治の病の子どもや、幼くして命をなくす子どもを前に、不憫に思ったり、悲しく思ったり、あるいは無力感、敗北感を感じるのが「何か変だ」と思っていたのは、このことだったのかと解ったのです。でも、その晩は、とても他人様の子どものことを考える余裕なんかちつともありませんでした。「うちの子どもはどうすればいいのか、うちの子どもはどうしたらいいのか」と頭の中がぐるぐると堂々巡りをしながら、ほとんど眠ることも出来ず一夜を明かしたようなわけであります。

わが子に關しては次の日、妻が学校に相談に行きましたところ「そういう心配は全然ありませんよ」と先生に言ってもらったということで妻は「よかった、よかった」と万々歳でありました。その話を聞いて、私も勿論大喜びをし、一件落着のはずでした。でも私には一つ大きな課題が生まれました。

「待てよ、でも、世の中に、特殊学級でお世話になる子どもがいる限り、特殊学級に行くのだからこそ、日本一の幸せ者であるという道はなければならないではないか」、「世の中に病気の子どもがいる限り、病気であるからこそ日本一の果報者だとい

う世界がなければならぬか」「世の中に三歳でこの世を去る子どもがいる限り、三歳でこの世を去るのだからこそ日本一の子どもですよ、という道がなければならぬではないか」と思うようになりました。「そんなことはなんら問題にならない」と言う世界がなければならぬかと考えるようになりました。以来その道を探すのは私の役目だろうかと気負っては見たものの、その答えは、考えても、本を読んでも、なかなか見つかりそうにありません。

これはやはり無理な注文だろうかと思っていた時、テレビであるニュースを見たのであります。ある歌手がリサイタルを開いたというニュースであります。その歌手の人というのはある一連の曲に感動してその歌を歌うためにリサイタルを開いたのでした。その一連の曲をつくった人は、別のある人がつくった詩にとっても感動してそれらに曲をつけたのでした。で、そのニュースの中心人物はその一連の詩をつくった人です。ニュースによると、その作詞した人は六歳の時、脳膜炎に罹り、後遺症で手足の自由がきかなくなったのだそうです。言葉を喋ることもできなくなったのだそうです。コタツに座っておられるテレビ画面から伺うに、四〇歳は過ぎておられるよ

阿弥陀様と私

うでした。

その人が詩をつくるのはこうであります。傍らに座ったお母さんが、五十音をゆつくり「あ・か・さ・た・な」と横に言っていられる。「た」のところまでいくと、その人の出来る唯一の動きの瞬きをされる。テレビでは瞬きと解説されていましたが、若いお嬢さんのウインクのような瞬きではなく、顔全体をしかめるような瞬きです。すると、お母さんが今度は「た・ち・つ・て・と」と縦に言っていられます。それで「つ」のところでもまたあの瞬きをして「つ」の一文字が出きます。

このようにして字を連ねてできた詩が、なんと二〇〇にも達するといふのであります。その中の一つが紹介されました。正確には憶えていませんが「生きててよかったです」という詩であります。「生きててよかったです。こんな重い病気になってよかったです。おかげで神様にお会いすることができました。そして生きる喜びを知った。こんな重い病気になってよかったです。生きててよかったです」という内容でありました。

私はこのニュースを見てとても感動しました。とてもうれしくなりました。病気がありながら、私たち健康者よりはるかに確かな生きる喜びを味わっておられる人が現

におられる。私が探していた「病気でありながら、人並み以上の幸せを感じることに出来る道」は絶対にある。「少なくともここにこの人がそのことを証明しておられる」と思えて、とてもうれしかったのであります。

もう一つ私に感動と勇気を与えてくれる事がありました。本屋さんでチラッと目に入った永井隆という人の「この子を残して」という本を立ち読みした時であります。永井隆という人は長崎大学医学部放射線科の教授をしておられた方であります。終戦前、放射線の研究に携わっていたところ、放射線障害で自分自身が白血病というガンになる。「どうしたらいいか」と奥さんに相談したところ、奥さんは「あなたはこの仕事が好きなのでしょう。この仕事があなたに与えられた仕事だと思っているのでしょう。だったらこの仕事を続けてやったらいいじゃないですか」。「仕事は続けたいが、これを続けると自分の病気はどんどん進んで、そんなに長く生きられないだろう」。「自分が死ぬことは構わないが、死んだ後のお前や子どもたちのことが気になる」と言う、「私たちのことは神様と相談して何とかやっていきますよ」と奥さんに元気づけられます。永井さんの一家はキリスト教の信者だったようです。奥さんの言葉に

阿弥陀様と私

励まされて仕事を続けようとしていた矢先には原爆が落とされます。するとそれこそ自分の専門分野の放射線障害の患者さんがどんどん入院してきます。その人たちの治療に明け暮れているうち、自分の病気が進行してついに寝たきりになってしまいます。それに、頼りにしていた奥さんと子どもの何人かを原爆でなくしてしまつて、茅野という子どもと誠という子ども二人を連れた身で、寝たきりになるわけです。そういう境遇を心配して不憫に思った周りの人達が二畳一間の家を建ててくれます。そしてその一畳分に布団を敷いて寝ておりました。

ある日の午後、外で遊んでいた茅野という子どもがいつのまにか帰ってきて、そーつとお父さんの布団の中に入って「お父さんのおい」と言つて、お父さんの寝ているのを邪魔しないようにまたそーつと出ていく。世の中にお母さんのおいを嗅ぐ子どもはいくらでもいるだろうが、お母さんがいないから汗くさいお父さんのおいを嗅ぎにくる。「自分は子どもたちに何もしてやることはできないが、生きていれば、ま、においくらいは嗅がしてやることができる」。「でも自分は間もなく死んでしまうだろう」。「死んだ後、子どもたちは一体どうやって生きていくのだろうか」。「第一、

葬式の日、子どもたちは墓場から帰って、この部屋のどこに座るだろうか。「やはり押し込みから布団を出してきてお父さんのおいを嗅ぐだろうか」などと書いてあるのが永井隆さんの『この子を残して』の最初の数ページであります。それを讀んでとても感動的で、感傷的で、もうその先を讀むのが辛くなりました。そのとき、こう思ったのであります。

世の中に理想の父親像を言えと言うと、いろいろ言うだろう。「一定の収入があること」、「大所高所から判断ができること」、「たまには子どもと一緒に遊んでやること」ができること、「日曜参観日にはすすんで学校に行くこと」、「たまには台所に入ってお父さんの腕自慢のお好み焼きでもつくって子どもたちにもふるまうこと」などなどいくらでも言われることでしょう。理想の父親像の条件はいろいろと言うことはできるだろうけれど、このお父さんはきつとそのどれも満足できない。子どものご飯もつくってやることもできないかもしれない。子どもと遊んでやることもできない。子どもの服の綻びさえも縫ってやることはできない。理想の父親の条件のいずれにも満足ではないのかもしれない。

阿弥陀様と私

しかし、こんな父親だけど、茅野にとって誰がこの父親に代わることができただろうかと考えてみると、誰も代わりができるものではない。そう思った時、「この父親は茅野にとって日本一のお父さんだ」と思えるようになったのです。「このお父さん、一定の収入があれば日本一のお父さんがなあ」と言うのではない。「せめてこのお父さん、子どもたちと遊んでやることができたら、茅野にとっていいお父さんになるのだがなあ」と言うのでもない。「せめて子どもたちのご飯をつくってやることのできたら、いいお父さんになるのだがなあ」と言うのでもない。「収入もない、遊んでやることもできない、ご飯もつくってやることもできない、何もできない、このお父さんが、そのまま日本一だ」と思えるようになったのであります。「このお父さん、せめて長生きさえすれば日本一のお父さんになるのだがなあ」と言うのでもない。「間もなく死ぬかもしれないお父さんが、それでいて茅野にとって日本一のお父さんである」と思えてきたのであります。

さてお話ししましたように、「手足が動かず、言葉が喋れず、いわば不幸を絵に描いたような人が、病気のままで、われわれ健康人よりも遥かに確かな生きる喜びを味

わい」、「まもなく死ぬかもしれない父親が、そのまま日本一だ」と考えるに至ると、私の求める世界はきつとあると心強くなりました。

そのことは一方で、「では、医学は一体何をしているんだろう」という大きな疑問との出会いでありました。医学は何とかして病気を治そうとします。医学は何とかして命を延ばそうとします。でも「病気でも日本一なら、病気を治さなくてもいいじゃないか」。「早死にしたって日本一なら、何も生き永らえさせる必要はないではないか」という疑問がでてまいりました。それと同時に、それまで誇っていた医学が、何となく色褪せて見えてくるようになりました。

阿弥陀さまとの出会い

私は広島県の山奥で育ちました。広島県は浄土真宗に熱心な人が多いところで、私の家族も、特に母親が朝から晩まで「念仏が大事だ」とよく言っていました。母親は私にも「念仏しないといけない」とよく言っていました。念仏は科学的ではありません。

阿弥陀様と私

ませんし、私にとって全く合理的ではありません。そんなところを母親に質問しても納得できる答えは出て来ません。年齢が上がるにしたがって、「ばからしい、あほらしい」と言う思いが益々強くなっておりました。大学生になった頃には私は、念仏の話をする母親をもう全く相手にしようとしませんでした。

そんな時、母親はよく私に「勝、一つお願いがある」と言うのであります。「何だ」と聞くと、「これをしてくれよ」と手を合わせ念仏の催促をします。「念仏のことか。ああ、分かった、分かった」、「なんまんだぶー、なんまんだぶー、これで良からう」と言うと、母は「それでいい、それでいい。ありがとう」と言っておりました。そして、またしても、「一つお願いがある」。「なんだ」。「これをしてくれ」。「なんまんだぶー、なんまんだぶー、これでよからう」。「それでいい、それでいい。ありがとう」と言うやり取りを繰り返しておりました。そのように母親は「念仏をしろ」と迫るのですが、私の心の中では「念仏なんてあほらしいもの、ばかげたもの」、「それより現代の科学的な考えの方が遥かに合理的で納得でき、足が地についているのではないか」と長い間思っておりました。

でも今、こうして科学的な考え方、医学的な考え方が色褪せて見えてくると「ひよつとしたら母親の言うあの念仏は本物かもしれない」と思えてきました。その気持ち私が私を一気に宗教に引きつけて、親鸞の教えに引きつけました。

早速何か宗教関係の、否、親鸞の教えの本を読んでみたいと思うようになったのですが、さて何を読んでいいかさっぱりわからないのであります。ただ、耳の奥底にかすかに『タンニシヨウ』というのがありましたので、その『歎異抄』を探して読むことにしました。ところが、この本は実に難解であります。文章はきれいで文学的なのであります。解説を頼りに読んでも私には少しも納得できるものではありませんでした。しばらく苦闘した挙句、親鸞に関する他の本もいくらか読んで見ましたが、いずれも難解でとても理解できそうにありません。砂を噛むようで、ちつとも心の糧になるものではありませんでした。

とにかく念仏が大切というのだから、「南無阿弥陀仏」と称えてもみました。病院では患者さんの前で「なんまんだぶつ」と言う怒られますから、患者さんの前では言わずに、例えばエレベーターの中に他に誰もいない時、小さな声で「なんまんだぶ

阿弥陀様と私

つ」と称えてみたり、当直の夜、救急室までの誰もいない長い廊下を歩く時、「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」とつぶやいてみたり、あるいは車の中に私だけがいる時などに「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と大きな声を張り上げてみるなどしましたが、いくら称えても全然分かんず、何の進歩もありませんでした。一声称えれば救われると言われるのに、一声どころか一〇〇ぺんも二〇〇ぺんも称えたのに、ちつとも救われたという感じがありませんでした。

そんな歯がゆい思いを続けていましたが、「どうせ解らないなら、親鸞聖人が書いた本の中でも最も難しいとされている『教行信証』を読んでみよう」と思い立ちました。星野元豊氏の解説書「講解教行信証」を手に入れて読み始めました。いやあー、実に難解で、砂を噛むようで全くわかりませんでした。何度も放り出そうとしながらも、何か隠れた宝物でも捨てるような気がして手放なすことが出来ず、またしては引き出して読んでおりました。そんなことをしながら四年ばかり過ぎたある日、ハッとわかるようになりました。阿弥陀様に会えた感じ、親鸞聖人に会えた感じがするようになりました。今まで砂を噛むようだったものが、みずみずしく迫ってくるようにな

りました。では一体何がわかったか。

一切は阿弥陀仏様の救いの中

解ってみると、一切は阿弥陀様の支えの上でした。私は勿論、不治の病の子供達も、幼くして命をなくす子供達も皆阿弥陀様の救いの中、阿弥陀様の支えの上にあります。

阿弥陀様は「一切がそのままがいい」と言われる。「あるがままでいい。すべてが平等だ」。「お前の味方だ。どんなことがあってもお前を離しはしない」と言われるのであります。「早死も長生きも同じだ」と言われる。「長く生きるのはいいけど、早く死ぬのはだめだ」とは言われない。「早く死のうが、長生きしようが、同じことだ。だから幼くして命を落としても大丈夫だ」と言われる。「病気も健康も同じだ」と言われる。「病気は悪くて健康がいい」なんて言われない。「病気だろうが、健康だろうが、そんなことは問題ではない」。「どんなことがあってもお前を離しはしない」。「だ

阿弥陀様と私

から病気だつてちつともかまわない。「治つてもいい、治らなくても、どちらでもかまやしない」と言われるのであります。「目が見えないのも、見えるのも同じことだ。だから見えなくてもいい」と阿弥陀様が言われるんです。私はとても言えませんが、阿弥陀様がそのように言われる。「耳が聞こえなくてもよい」「手足が不自由でもよい」「ガンになつてもいい」「高血圧でもいい」「寝たきりでいい」「全てそのままでもいい」であります。健康に関することだけではありません。「戦争でもいい。平和でもいい。不況でもいい。失業でもいい。地震でもいい。台風でもいい。何があつてもお前を放しはしない。そのままでもいい」と言われるのであります。「どんなことがあろうと、お前を放さない」と言われる。

普通と悲惨

「病気から治ろうと努力している人達、長生きしたいと思つている人達に『早死してもいい。病気が治らなくてもいい』つてずいぶんひどいことを言われるではない

か」と思われるかもしれませんが。「第一そんなこと正しいの？ そんなこと言っていたら進歩も何もあつたものではない」、「阿弥陀様ってそんなに冷たいの？ 優しいのではないの？」と言われるかもしれませんが。

実は阿弥陀様は正しいのであります。実は阿弥陀様こそ優しいのであります。先ず、阿弥陀様の言われるのが正しいという話からしましょう。このことを解っていただくのに例を出します。

ある時、お母さんが小学三年生の男の子を小児科に連れてきて「うちの子どもの背を高くしてください」と言われます。大抵の小児科医の診療机には子どもの成長曲線と言うグラフが置いてあります。各年齢の平均や正常値の幅が数本の線で示してあるグラフです。それに合わせてみると、年の割りに背が高すぎるか、平均に近いか、あるいは異常に低いかがすぐわかります。で、そのグラフから判断すると、その子の身長は全く正常で、もし全国から同じ年齢の子どもを一〇〇人集めて背の順に並べたとすると、その子は前から三五番目くらいのところに相当する身長でした。平均が五〇番目で三五番目というのは平均より少し小さいのですが、医学的に低身長というので

阿弥陀様と私

はありません。医学的には二一九九番目までは正常なのです。三五番目はごくごく普通であります。医学的に問題になりませんからそのことを話すと、お母さんは「ここに来て、またその話か」とうんざりするような顔をされました。この親子は、私のところに来るまでに、すでにあちこちの病院や児童相談所などに相談に行っておられました。今言ったような理由で、どこに行っても相手にしてもらえませんかからがっかりであります。お母さんは「私も背は小さいけど、でも私は女だから我慢できます。男は背が高くなければなりません」と主張されます。「少々勉強なんか出来なくてもいいと思います。少々病氣したっていいと思います。でも男は背が高くなければ……」と泣き崩れるのであります。お母さんから見るとその子は背の低い悲惨な子どもですから、「この子の背を何とか高くしてやるのが親の使命だ」くらいに思っておられるのです。

で、その肝心の子どもは私から見ると、ごく普通の全く立派な子なのです。それが、おかあさんから見ると、可哀相な悲惨な子どもなのです。一体なぜこの差が出てくるのでしょうか。その子どもがだんだん悲惨になったり、だんだん立派に変化している

のではありません。同じ人間が、ある人から見ると悲惨で、ある人から見ると普通、立派なのです。どうしてこの差が出てくるか。理由は一つです。お母さんには「男は背が高くあってほしい」という欲望があります。欲望を通して見ると、前から三五番目の子どもは悲惨で、悲しい子どもに見える。私たちのようにそういう欲望がない者には普通に見えるのです。お母さんは「大きくあってほしい」という色眼鏡をかけて子どもを見るから、赤い色眼鏡をかけてみると白いものが赤く見えるように、普通の子どもが悲惨に見えるのです。欲望という色眼鏡を外して見ると悲惨でも何でもないのです。白が白に見えるだけなのであります。

おおよそ世の中、「あれは立派、これは悲惨」、「あれはよい、これは悪い」、「あれは素晴らしい、これは惨め」などという優劣は、皆、色眼鏡の成す技です。欲望という名の色眼鏡の成す技です。私たちは、欲望の色眼鏡をかけて、ありもしない価値を幻想しているのです。

岡山のデパートにティファニーの店ができました。そこに行くとダイヤの指輪などが沢山並べてあります。若いお嬢さんが涎を落とさんばかりに見入っております。例

阿弥陀様と私

えば、後から〇を数えてみると五〇万円と思つたら〇が一つ違って、なんと五〇〇万円だというものもあります。このダイヤに五〇〇万円の価値があるというのは、それを欲しいという欲望のある人がいるからです。欲しいという欲望のない人には価値はありません。欲しいという欲望の色眼鏡をかけて見ると五〇〇万円の価値も納得できるのです。私のように欲しいとは思わない、ま、やろうと言われればもらつて帰ると思うほどの人にはとても五〇〇万円の価値があるように見えないのであります。このように、おおよそ世の中、「あれは価値がある、これは価値が低い」、「あれがいい、これはすばらしい」などというのは全て欲望の裏返しであります。欲望の色眼鏡の作り出す幻の価値に振り回されているのです。

ありのまま

阿弥陀様は欲望の色眼鏡なしで一切の物事を見られます。色眼鏡をかけずに白いものは白、黒いものは黒、青いものは青と見られるだけの話であります。我々凡夫とは

違って、幻の価値を幻想されないのです。

私たちからすると例えば耳が聞こえないというのは、非常に悲惨であります。何故か。私たちには「耳が聞こえるようにあつてほしい」という欲望があります。「耳が聞こえないと第一言葉を喋る事ができないではないか。意志の疎通に困難を極めるだろう。しかも物事を思考するには言葉を使うから、言葉が喋れなかったらものが考えられないのではないか。だから、言葉ができるようになるためには耳が少しでも聞こえるようにあつて欲しい」と思えます。この欲望を通してみるから、耳が聞こえない者が悲惨に見えてくるのです。

ところが、「耳が聞こえてほしい」という欲望のない阿弥陀様からすると、つまり欲望の色眼鏡なしに物事を見るので、「耳が聞こえないのか、あ、そうか」というだけで、悲惨でも何でもありません。耳が聞こえるもの、聞こえないものに全く差は出てこないであります。そして、阿弥陀様が「耳が聞こえようが、聞こえまいが、そんなことは問題ではない」とされるところに世の中に耳の聞こえない人が存在できる根拠があるのです。誰かがこれから先、耳が聞こえなくなっていくことの出来る基盤

阿弥陀様と私

があるわけでありませう。目が見えないというのも私たちには許しがたい事実であります。でもこれも色眼鏡が成す技であります。阿弥陀様は色眼鏡なしで見られるから、「目が見えようと、見えまいと同じことだ。だから見えなくたって、ちっともかまやしない」と目の見えない者も全面的に許され、支えられているのです。ここに、世の中に目の見えない人が存在できる根拠があるのだと私は思うのです。三歳でこの世を去るなんて、とても私たちには耐えられない、許しがたい事実です。親御さんからするととっても大変なことで、こんな不条理なことはありません。あつてはならないことです。でも、それさえも色眼鏡の成す技であつて、色眼鏡のない阿弥陀様からすると「三歳で死のうが、八〇歳で死のうが、同じことだ。だから三歳で死んだつてちっともかまやしない」と言われるのであります。だから三歳で死ぬ事ができるのです。

阿弥陀様は色眼鏡をかけずに幻の価値を幻想せず、あるがままに正しく見られるのであります。正確には阿弥陀様が見られるのではなく、色眼鏡なしで正しくものを見る、その知恵のことを「阿弥陀仏」と言うのであります。それにひきかえ私たちは欲望があります。欲望があるから「あああつてほしい、こうあつてほしい」という悩み、

苦しみが出てきます。それを煩惱と言います。煩惱は色眼鏡によって幻想する幻の価値に振り回される心の動きを言うのであります。「煩は身を煩わし、惱は心を悩ます」。煩惱とは色眼鏡をつけていることの裏返しなのであります。

医学はその根底で、色の濃い色眼鏡をかけています。「健康でありたい」というどぎつい色眼鏡をかけている。そこからものごとを始めているのであります。医学は健康に、ありもしない価値を幻想しているのであります。見当違いを犯しているのであります。医学だけではありません。経済学も商学も法学も政治学も皆さんが専攻している文学も皆、ありもしない価値を幻想することから始まっているのであります。

聖徳太子の言葉に「世間虚仮、唯物是真」というのがあります。世の中のこととは皆虚仮、ただ仏様だけが眞実だ。私たちが見るのは全部色眼鏡を通して見ているのであって、ウソだ、色眼鏡をかけてない仏様だけが正しいという意味であります。「歎異抄」に「煩惱愚足の凡夫、火宅無常の世界はよろずこと皆もてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞ眞実にておわします」という言葉があります。よろずのこと皆もて空言戲言だと。政治学も経済学も医学も法学も、道徳も倫理さえ

阿弥陀様と私

も空言戯言だと。親鸞聖人の言葉の中に「善し悪しの字をも知らぬ人は皆、まことの心なりけるを、善悪の字知り顔は大空言のかたちなり」というのもあります。「あれはいい、これは悪いというのは色眼鏡を通して言っているのであって、色眼鏡なしで見たらそんなことはない。あれはいい、これが悪いというのは皆大嘘だ」ということであります。阿弥陀様こそ正しいのであります。

対治と同治

次は、病氣や早死にを認めるのは本当に優しいのかの問題です。仏様が正しくて、我々が間違っていると、病氣の人や、先行きがそう永くなさそうな人に対して、「どうぞ元氣になりますように、少しでも長生きしますように」というのなら、それが少々間違っているでもいいではないかと思われるかもしれません。こちらの方が本当の優しさではないかと思われるかもしれません。本当に患者さんのことを思い、患者さんの側に立って思いやりがある優しい医療なら、たとえそれが正しくないとしても

それでもいいではないかと思われるかもしれませんが。しかし、これは本当のところは優しくないし、患者さんの側に立っていないのであります。

たとえば小児科の病棟に奇形が一杯ある子どもが入院してきました。優しい看護婦長さんなら「この子どもは見せ物ではないから、他の患者さんや見舞い客の目に付きにくいように、廊下の近くではなく部屋の奥に収容してあげよう」とか、「この子は個室に入れてあげよう」などと配慮してくれます。確かにその子を思って配慮するのだけど、こんな優しい看護婦長さんの思いやりも、その根っこには「この子どもは奇形のある醜い子どもだ」という軽蔑があります。「こんな奇形のある、すばらしい子どもだ」という気持ちなら、隠すどころか「ねえ、見て見て、こんないい子でしょ」と自信たっぷり他人に見せる分でも、決して「奥の方の見えないところに入れてあげよう」という気は起こらないはず。私はいつも「思いやりも心の狭さ」と言うのであります。一見、優しいようで、実はその前に軽蔑があるのです。「どうぞ元気になりますように」というのは、一見、優しいのでありますが、その出発点に「元気でないのはだめだ、病気のはだめだ」というのがあって、そこからものこ

阿弥陀様と私

とが始まっているのであります。本当に優しいのではないのです。

五木寛之さんが『生きるヒント』を書いておられます。その中に私が書いた文章を引用してくださっています。「対治」と「同治」という言葉です。私は医学雑誌の中で加藤弁三郎と言う人と阪大の医学部の中川米造教授の対談の中で加藤弁三郎さんが「対治」「同治」について説明されているのを読んで知ったのです。氏の説明によると、例えば熱が出た時に、氷で冷やして熱が下がるようにすることを対治という、お布団を一杯かけてそれで熱が下がるようにするのを同治ということでした。あるいは、元気をなくしている人に「お前、何をくよくよしている、元気を出せ」と言ってお尻を叩いて元気を出させるのが「対治」、一緒に涙を流して肩の荷を降ろさせるのが「同治」だと説明されていました。そして「対治よりも同治の方が数段上ですよ」と説明されていました。この文章を読んで私は「何でも同治に努めなといけな」と思っていたのですが、長い間、対治と同治について誤解しておりました。

誤解に気がついたのは、ある時、食欲不振症で、ものを食えることができなくなる子どもが入院してきた時のことです。その子は私の病院に来るまでに、あちこちの施

設、医療機関を沢山訪ねていましたが、食欲は一向に改善しませんでした。中学二年の女生徒ですが、病院に来た時は三〇キロくらいに痩せ細っていました。もう外来で治療するのは無理で入院してもらうことにしました。入院すると看護師さん達は毎日ミーティングを開いて「この子どもが食べる事ができるようにするにはどうしたらいいか」を話し合いました。「あの子には特別に食事の時間を決めないことにしよう」。「あの子どもには特別に給食にお願いして好きなものをつくってもらうことにしよう」。「あの子には特別に外から食べ物を持ち込んでもいいことにしよう」。「あの子には特別に看護師さんが誰か順番について一緒にご飯を食べることにしよう」などと、「あの子は特別に」ということをいろいろと提案して、何とか食べる事ができるようになる方策を考えて努力して実践してくれました。主治医の先生は「あの子どもが食べなくなつたのは一体何が原因だろうか。学校に問題があるのだろうか。家庭に問題はないだろうか」などと学校に向いて事情を聞いたり、友だちに来てもらって、平素の子どもの様子や友だち関係を聞いたり、あるいはお母さんにじっくり話を聞いて子どもが食べなくなつた原因を探るなど努力を惜しみませんでした。親御さんもこ

阿弥陀様と私

の子どもが食べられるようにといろいろと努力して頑張っておりました。「いっそのことが私が代われるものなら代わりたい」と思っているくらい子どものことを思っておられました。

このように周りのもの皆が、この子どものことを思い、何とか食べられるようにと頑張ることを「同治」というのだと思っていたのですが、実はこれは「対治」でした。と言うのは、周りの人たちの努力は結局のところ「食べないことは許さない」という一点で、この子と対立していたわけです。「食べなきゃ食べなくていいよ」というのが「同治」なのであります。そんなことを言っていたら痩せ細ってしまうのではないか。「痩せれば痩せても、かまやしない」というのが同治なのであります。そんなこと許していたら痩せ細って死んでしまうのではないか。「死ぬなら死んだってかまわないよ」というのが同治なのであります。

子どもが死んでもそれで良いなんてそう簡単には思えるものではありません。実際病院で子どもの死ぬ場面に何回も立ち会いましたが、親御さんには耐え難い苦しみであります。例えば子どもの呼吸があえぎあえぎになると、大抵のお母さんは「死んでは

いけない！ あっちへ行つてはいけない！ 先生何とかして！ 死んではいけない！」などと気が狂つたように叫びます。当然であります。わが子が死のうとしているのですから。でも中には「そうか、そうか、ようがんばった。もういい、もういいよ」と死を認めるお母さんがいらつしゃいます。

アメリカの医学雑誌で、小児科の、最新の、内容の最も優れた研究論文だけを載せてくれる権威の高い雑誌があります。私たちが研究結果を投稿してもなかなか受け付けてもらえないような格調高い医学雑誌です。そのように、研究者が書いた論文でも並大抵のものでは掲載してもらえないその雑誌に、ある患者さんのお母さんの手記が載つたことがあります。自分の子どもが白血病でこれまで病院でいろいろ治療をして来たが、再発に再発を重ねて、だんだん薬が効かなくなつた。病院にいらると、「ご飯ですよ」と言つて食事が配られてもその時は全然食欲がない。しばらくして、「ちょっとおながすいたようだから少し食べてみようか」と思う時には既にお膳は引かれてしまつている。「シャワーの時間ですよ」と順番が来てもその時は熱があつて浴びられない。しばらくして熱も下がって汗が一杯出たから「シャワーを浴びようか」と

阿弥陀様と私

思う時には、シャワー時間はとくに過ぎていてシャワー室には鍵がかかっている。あるいは大好きなお父さんの面会にも時間制限があつて好きなお父さんにも簡単には会えない。最近は薬も効かなくなつて、治療効果もはかばかしくない。「病院にいるよりいつそのこと、この子どもをつれて我が家に帰ろうか」とお母さんは主治医の先生と相談します。主治医の先生も「家に帰るのも一つの手かもしれない」と許可を出してくれて、お母さんは子どもをつれて我が家に帰りました。そして自分の家では、昼間、機嫌がいい時にお父さんが農作業のトラクターに乗せて久しぶりに子どものキヤッキヤツという喜ぶ声を聞くことができた。夜、子どもが「痛い、痛い」と言う時には、外に出て、キラキラ光る夜空の星を見て気を紛らわすこともできたなどと書いたのが、お母さんのその手記であります。

で、その子どもにもいよいよ最後の時が来て、あえぎあえぎの呼吸をするようになった。皆さん、子どもが死ぬ時の様子を知らないと思いますが、子どもは死ぬ時はだんだん呼吸が遠ざかつてきて、弱い呼吸をあえぐようになります。そんな様子を見ていたお母さんには、このあえぎ、あえぎの呼吸が、まるでこの子がこの世に生まれてく

る時のあの陣痛の苦しみと同じように思えてきたのだそうです。子どもが生まれる時、陣痛の度に「今度は生まれるかもしれない」と力んで一休みし、また「今度の陣痛では生まれるかもしれない。頑張れ、頑張れ」とお腹の子どもに応援しながら力んだように、あえぎあえぎの呼吸をする我が子に「今度の呼吸で死ねるかもしれない。頑張れ、頑張れ」、「次の呼吸で死ねるかもしれない。頑張れ、頑張れ」と「頑張って死ね」と応援するのであります。死ぬしか道のないものに「生きろ」と言うのは、今の皆さんのように生きるしか道のないものに「死ね」と言われるのと同じように、大変しい注文であります。死ぬしか道のないものに「死んでもいい。頑張って死ね」と応援するものこそ本当の味方なのであります。本当の優しさなのです。死ぬしか道のない我が子に「頑張って死ね」とお母さんは応援するのであります。そしてその子どもがいよいよ最後の息を引き取った時、まるでこの子どもがオギャアとこの世に生まれて「やった。生まれた」と言ったと同じように、お母さんは「やったあ、死ぬ事ができた！　うちの子、死の勝利を勝ち得た」と喜ぶのであります。この手記を読んでも我が子の死をこんなにも寛大に受け入れるお母さんに頭が下がる思いがいたしました。

阿弥陀様と私

でも、このような優しいお母さんといえども、「本当は元氣になつてほしいのだけど、病氣がここまで進んだならしょうがない。」「ここまで来たら、まあ死んでもしょうがない」と言うのであつて、根っから「死んでいい」というのではないのです。

阿弥陀様は最初から「長生きしようが、早死しようが、そんなことは問題ではない。優劣なしだ。だから早く死んだつて、ちつとも問題ではない」と根っから死ぬこと、生きることに何のこだわりもありません。だから幼くして命をなくする子どもに「それでいい、それでいい」と言われるわけであります。これこそ阿弥陀様の優しさで、「同治」とは、この阿弥陀様の優しさのことを言うのでして、「同治」が「対治」に優れていると言われた理由であります。本当の優しさこそ同治であります。「同治」とは、阿弥陀様の慈悲のことだったのです。

それにひきかえ医学はいつも「対治」しかできないのであります。ああではいけない、こうではいけない、という対治しかできないのであります。医学は所詮、誤った考えに基づく色眼鏡をかけて行動するものでありますから、一見優しいようではありますが、本当の優しさではないのであります。だとすると、対治しかすることの出来ない

い医学は優しさの反対であります。厳しさ、軽蔑、憎しみというカテゴリーに入るのであります。

ところが、いくら医学や私の行う医療が対治であり、ありもしない価値を幻想した上の誤った考えによるもので、しかも優しさではなくその反対の厳しさ、軽蔑、憎しみのカテゴリーに属するものだと言われても、医者からは「そうか、同治がいいんだな。死ぬれば死んでいいよ。痛ければ痛くてもいい」とはとても言えないのです。「痛い、痛い」と苦しむ患者さんには、どうしても「何とかして痛みがとれないだろうか」と考え行動し、肺炎で咳が出る患者さんにはどうしても「何とか咳がおさまらないだろうか。何とか呼吸が楽にならないだろうか」と思索を練るのです。阿弥陀様は正しい故に、優しいが故に「痛くても、痛まなくても同じだ」、「息が苦しかりくと、苦しくなかりくと、そんなことは問題ではない」と言われる。「長生きしようが、早死にしようが、そんなことは問題ではない」と言われる。にもかかわらず私は「痛いのはいけない」、「咳で苦しむのは許せない」、「長生きしないといけない。早く死んではいけない」と言う立場しか取れないのです。「目が見えなくてもいけない」、「呼吸

阿弥陀様と私

が苦しくてもいけない」、「痛いのはいけない」、「あれはいけない」、「こうでなければいけない」と考えてしまいます。しかも阿弥陀様の考えは向こうに置いておいて、無視して、私の意見を優先するのであります。

「それでいい」

阿弥陀様とは全く正反対の私の意見を優先するのであります。阿弥陀様と同じ考えにはとても成る事ができないのです。このように、阿弥陀様と同じ意見にならず、阿弥陀様の考えをよ所に置いて、無視して、私の意見を先にすることは阿弥陀様に反逆していることです。仏教ではこの反逆を「謗法罪だ」と言っています。人間の最も重い罪だと戒めています。でも医者をする、医療を行うということは謗法罪を犯していることになるのです。

ところが阿弥陀様は「謗法罪を犯そうが、犯すまいが、阿弥陀仏に反逆しようが、反逆すまいが、そんなことは優劣ない、同じことだ、だから一向に問題ではないよ」

と言つて私を許し、支えていてくださいます。この反逆の、謗法罪の私を「それでいい、それでいい」と阿弥陀様が支えていて下さるところに私が医者をしてできる根拠があるのです。前に、阿弥陀様が目が見えても、見えなくても問題はないとして下さるところに、世の中に目が見えない人がいる事のできる根拠があるといいました。今、私が阿弥陀様に反逆しようが、しまいが、「そんなことは問題ではない」と阿弥陀様がすんなり許し、支えて下さるところに、私が医者をしてできる根拠があるのであつて、目の見えない人が存在することも、私に医者ができるのも両方とも阿弥陀様の「それでいいよ」という支えの上に成り立っているのであります。

他人様の病氣ならまだしも、わが子が、たとえばガンなら私はもつともつとうろたえるに違いありません。もつとオロオロして「何とか治る方法がないか」と右往左往するに違いありません。私は我が子の病氣をとでも同治など出来るものではありません。「それでいいよ」と受け入れることの出来ないのは、子どもの病氣の時だけではありません。しゃべり方が悪くても、ご飯を口の中に一杯いれてしゃべっても、玄関を上がる時の靴の脱ぎ方が悪くても許す事ができず、「それではいけない、ああしな

阿弥陀様と私

ければいけない、こうしなければならぬ」とあれこれ限りなく注文をつけるのです。阿弥陀様は全て「それでいいよ」と言われるわが子に対して、私は何一つ「それでいいよ」と言えないのであります。阿弥陀様のそれが愛なら、それが慈悲なら、私には愛も慈悲もないのであります。私はわが子さえも愛せない。私の子どもさえも愛せないという罪の深い身であります。そんな私を阿弥陀様は「お前が自分の子どもを愛するか、愛さないか、そんなことは問題ではない。それでいい、それでいい」と私の全てを許し支えていて下さいます。そこに、私が人の親であることが出来る根拠、基盤があるのであります。

人が悩んだり、悲しんだり、苦しんだりするのはすべて、阿弥陀様が「それでいい」と受け入れ済みのところを、「それではいけない」と拒絶するところに成り立っています。人が悩み、悲しみ、苦しむのは謗法罪故なのであります。現実に人が生きるということは、阿弥陀様に反発し、謗法罪を犯しているということです。それが阿弥陀様から「そのまま、それでいい」と許され支えられているのであります。私が生きて命を燃やすということは、阿弥陀様に反発し続けていることであり、そして反発

し続けている私が「それでいい、そのままでもいいよ」と阿弥陀様に支えられていると言ふことです。私の生きる根拠はここにあるわけでありませう。それはまるで、お母さんに抱っこされた子どもが「お母さんのバカ、お母さんのバカ」と言いながらお母さんの顔を叩き続けても、お母さんは決して抱っこの手を離さず、決して落として怪我をさせないのと同じようなものです。どんなに「お母さんのバカ」と言つても、お母さんは「そうか、バカか、バカ、よしよし」と支えの手を離されないう。私がどんなに阿弥陀様に反発しようとも、お母さんと同様に私を支えていて下さる。これが阿弥陀様と私の関係なのであります。

医者ができるのも、親であることができるのも、人間であることができるのも、皆、阿弥陀様の「それでいい」という支えの上に成り立っているのです。実は正しくは、阿弥陀様が支えていて下さるのではなく、この支えそのものを阿弥陀仏と言うのです。そして支えられていると言ふ受動態のことを南無阿弥陀仏と言います。「ああ、支えられているな」、「ああ、私は支えられているな」というのを南無阿弥陀仏というのです。「ああ、私は支えられている」という意味で、そういう時には救いが成

阿弥陀様と私

り立っています。「南無阿弥陀仏」と一言称えれば救われるというのは、一言称えるとそのお陰で救われると言うのではなく、救われるということは南無阿弥陀仏が成り立っていると言うことです。「ああ、私は救われている」ということがわかるその状態を南無阿弥陀仏ということです。

私を手を上げるのも、阿弥陀様が「そうか、上げろ」、私が手を下げるのも阿弥陀様が「おう、そうか、下げろ」と許し支えていくのださるところに成り立っています。足を出すのも、引くのも、食べるのも、寝るのも皆、阿弥陀様の「それでいい」というところに私がこうして生きていることができるのであります。やがて私が病気になるかもしれない。「病気になるたら、いけません」と阿弥陀様は言わない。阿弥陀様は「病気になるっても決してお前を放しはしない」と言われる。やがて私は老いぼれてくるかもしれない。阿弥陀仏は「老いぼれたら、いけない」とは言われない。「どんなに老いぼれようとお前を放しはしない」と言われる。惚けるかもしれない。「惚けたって放しはしない」であります。やがて私の心臓の鼓動が止まるかもしれない。阿弥陀様は「ああ、お前、死んだか、ではさよなら」と私を置き去りにされるのではない。

い。「死んでもお前を放しはしない」と何時までも支え続けて下さる。ここに私が死んでいける根拠があるわけでありませう。これが私と阿弥陀様との関係であります。

阿弥陀様と私の関係は阿弥陀仏と私が「ああ、救われている」という南無阿弥陀仏の関係であります。だから南無阿弥陀仏が大事。「南無阿弥陀仏」と口で言うのではなく「救われている」という実感こそ南無阿弥陀仏であります。

「阿弥陀様と私」という話はこれで終わりです。ありがとうございます。

——二〇〇五年一月二五日——